

2009年7月6日(月)

第一生命経済研究所 経済調査部
副主任エコノミスト 人見 小奈恵

TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

世界的に株式相場調整の中、中国株は独歩高

先週、米雇用統計の予想以上の悪化などを背景に景気回復に対する不透明感が広がり、日米欧の株式相場は調整色の濃い1週間となりました。米国市場は独立記念日による祝日のため取引は4日間のみでしたが、NYダウは週間で▲1.9%と3週連続でマイナスとなりました。その他の主要株価指数はそれぞれ、英FTSE指数▲0.1%、日経平均株価▲0.6%、香港ハンセン指数▲2.1%でした。世界的にリスク回避の志向が高まり、債券が買われて金利は上昇、為替相場では新興国通貨が売られて円やドルが堅調でした。株式のみならず商品価格も下落。原油は在庫量が予想以上だったこともあって1週間で▲4.3%下落しました。一方、世界的に株価が調整する中、中国株式相場は独歩高の状態でした。中国の景気回復スピードが予想以上に速いと期待感から、上海総合株価指数は+5.5%の上昇でした。

今後の焦点は今週から本格化する米四半期決算発表です。S&P500指数全体の4-6月期収益見通しのコンセンサスは前期比▲36%の減益で、全業種が減益予想という厳しい状況です。業種間で大きな差が見られ、素材、エネルギー、金融などは大幅減益が見込まれる一方、ヘルスケア、生活必需品などのディフェンシブ関連は相対的に小幅にとどまっています。4月時点の予想と比べて減益幅が改善したのは通信、テクノロジー、一般消費財の3業種のみですが、この中で、テクノロジーセクターの改善(4/1▲26%→7/2 ▲24%)について、マーケットでは強い関心を集めています。半導体チップなどは完成品の川上の工程にあたるため、最終需要の動向を映すことから、テクノロジーセクターの収益動向は景気回復を占う上で重要視されています。今年の騰落率を見てみると、NYダウが▲5.7%なのに対して、テクノロジーのウエイトが大きいNASDAQは+13.9%、米フィラデルフィア半導体株指数は+24.3%であり、既にテクノロジーセクターの上方修正期待はある程度、株価に織り込まれてきています。

市場参加者少なく、先物に振らされる株式相場

国内株式市場は、前場に先物市場で大目売りが断続的に入り、日経平均株価は短時間で一気に50円ほど下げました。為替相場は円高方向に推移し、米株先物も軟調で、日経平均株価は9700円を下回った水準のまま戻らず、結局4日続落となりました。環境関連株の物色も今日は見られず、海運や鉱業など商品市況関連株中心に下落しました。景気回復に対する不透明感が残る中、米企業業績発表を控えて、投資家は様子見姿勢を強めており、出来高は非常に閑散でした。決算動向を見極めるまでは動きにくい状態が続いています。

以上